錦州と旅順の思い出

執筆：小坂宣雄

解題：大野絢也　　編集：尹国花

解題

はじめに

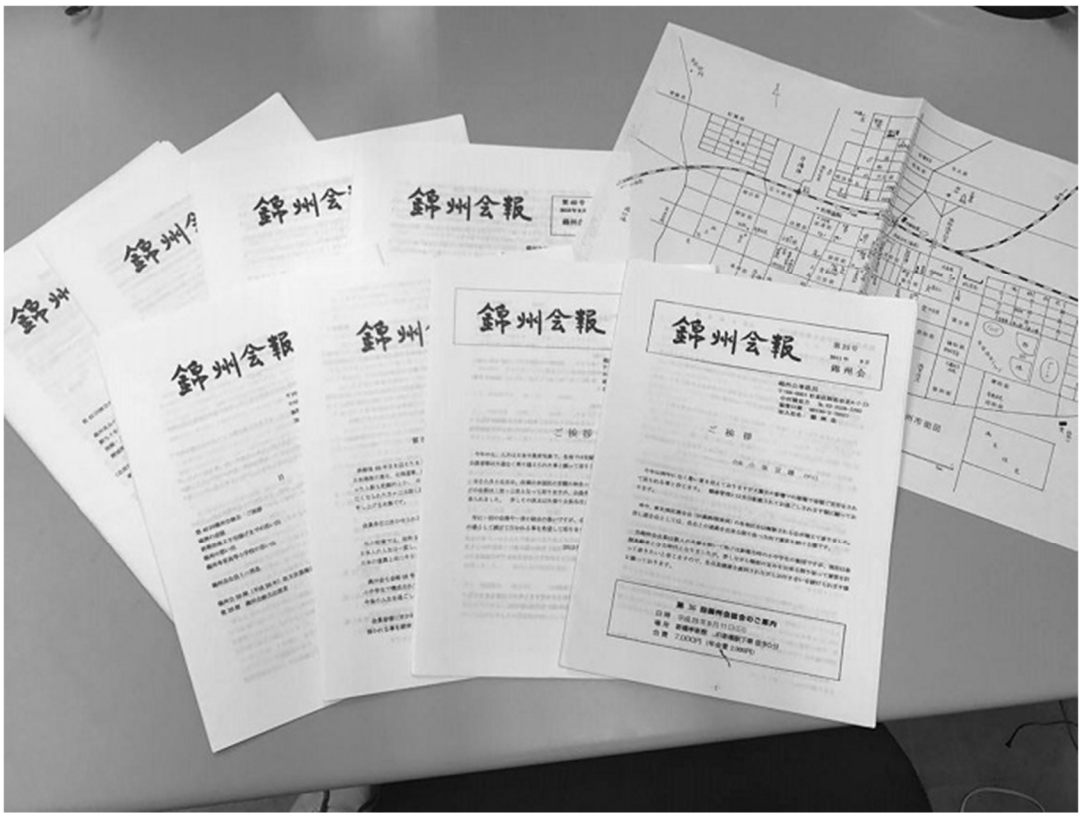
「錦州と旅順の思い出」は、小坂宣雄氏（以下、宣雄氏）が少年時代の満洲経験を執筆した回想録である。宣雄氏は少年時代を錦州で過ごしており、日本敗戦直後の経験が強く印象に残っていたことから、この回想録を執筆し「満洲の記憶」研究会（以下、本研究会）へご提供してくださった。

本回想録は、「旅順旅行の思い出」と「中国人（旧満人）との交流の思い出」の 2 篇による構成となっている。本稿では、資料の掲載に至った経緯について紹介した上で、回想録の背景となる宣雄氏の満洲経験および錦州会の概要について言及する。

第 42 回錦州会総会・懇親会の様子
撮影者：大野絢也
撮影日：2017 年 9 月 10 日

１．掲載経緯

本回想録は、執筆者本人である宣雄氏



錦州会からご寄贈いただいた『錦州会報』と錦州のタウンマップ
（錦州会会員の菊池暘子氏より）

『遥かなる追憶の街へ』私家版、2012 年
（錦州会会員の佐藤治子氏より）

によって 2017 年 11 月に提供された。その経緯は、以下の通りである。

本研究会の大野絢也は、2017 年 9 月 10 日に開催された第 42 回錦州会総会・懇親会に参加させていただいた。その際に、錦州会の会長を務めていた宣雄氏の知遇を得ることができた。宣雄氏より本研究会の活動についてのご理解を賜り、懇親会時に史資料提供のお願いを案内していただいた。また、錦州会の会報上で本研究会の活動を紹介記事として掲載していただくなど、さまざまな面でお力添えを

いただいた。そのため、錦州会会員の方々から本研究会に対し、『錦州会報』やタウンマップ、私家版の回想録など多数の史資料をご提供いただくきっかけとなった。宣雄氏は、自らの満洲経験を今後の研究に活用して欲しいという思いから、執筆した回想録を本研究会へご提供してくださり、本号掲載へと至ったのである。

２．小坂宣雄氏の満洲経験

それでは、宣雄氏とその家族の略歴を以下で紹介する。

宣雄氏の父親である辻繫氏（以下、繫氏）は、石川県金沢市の出身であり、石川県立金沢師範学校を卒業して、石川県内の小学校教諭を勤めていた。1926 年に大連での学校教諭募集を知って応募、採用されたため喜善氏（宣雄氏の生母）をともなって、渡満した。同年には、兄の治雄氏が生まれている。大連では日本人向けの小学校ではなく、現地中国人向けの小学校で勤めていた。

宣雄氏は、1931 年 6 月 11 日に大連において出生した。宣雄氏の出生後、喜善氏は病気で亡くなったため、大連で看護婦として働いていた小坂浜子氏（コサカハマコ、宣雄氏の養母、以下、浜子氏）と再婚した。そのため、宣雄氏の出生時の姓は辻であったが、浜子氏の家の姓をとって小坂となった。これは、浜子氏の実家において小坂姓を継ぐことのできる者がいなかったため、繫氏が婿入りするかたちをとった。

1936 年に繁氏は錦州省錦県の県公署へ赴任し、教育関係の行政職として勤めることとなった。満洲国の成立により満洲でも日本人教員や教育関係の要員の需要

浦頭引揚記念平和公園を訪問する宣雄氏
撮影時期：1997 年 8 月
（『錦州会報』22 号、1998 年）

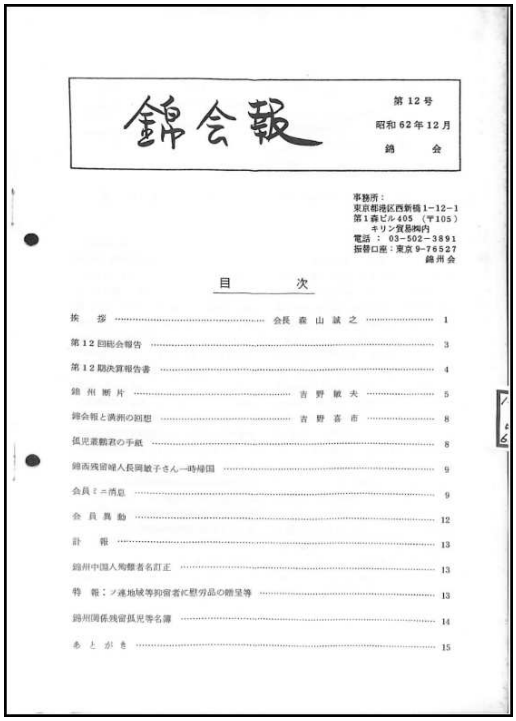
が高まっていたことや、繋氏が現地中国人向け学校で教諭として勤めていたこともあり、満洲国内への赴任を打診されたという。こうした経緯により、宣雄氏も 6 歳から錦州で少年時代を過ごすこととなった。

1945 年 8 月の日本敗戦によって、他の満洲各地と同様に錦州の情勢は大きく変化した。錦州は終戦直後から比較的早く国共両軍の戦闘が始まったため、日本人居留民は大きく動揺した。日本人と中国人の間で立場が変わってしまったため、中国共産党軍と中国国民党軍の双方から「扱き使われる」ような状態となり、宣雄氏も惨めな思いをしたのが今でも印象に残っているという。また、繋氏は戦時中に役所で教育関係の行政担当者であったため、戦後は民間人でありながら拘留対象者となった。

1946 年 5 月、繋氏は拘留中であり、治雄氏は出征後フィリピンで戦死していたため、浜子氏、宣雄氏、弟の守雄氏（モリオ）の 3 人で日本へ引揚げた。錦州は葫蘆島から距離的に近かったため、比較的早い引揚げであったとされる。引揚船は佐世保の浦頭港で上陸し、1 週間ほど針尾島で過ごした後、引揚列車で東京へ向かった[1]。福島県にあった浜子氏の姉の家をしばらく頼った後、浜子氏の姪の伝手によって、横浜の引揚者向け住宅に居住した。一方の繋氏は、最終的に戦時期の行動について問題視されなかったことから、先に引揚げた家族から 3 年遅れの 1949 年に、引揚げることができたという。その後の小坂一家は、一時的に静岡県の御殿場へ移住した時期もあったものの、宣雄氏は現在も神奈川県内に在住されている[2]。

３．錦州会の概要

錦州会は、日本敗戦直後に錦州において組織された錦州日本人居留民会を前身としている。その組織を引揚げ後も継承するかたちで錦州会が発足した。この時点では、満蒙同胞援護会傘下の地域代表組織として戦後処理に対応した。1974 年頃、引揚げ援護や戦後補償の活動が一段


錦会報

第12号
昭和62年12月
錦　会

事務所：
東京都港区西新橋1−12−1
第1森ビル405（〒105）
キリン貿易梅内
電話：03−502−3891
振替口座：東京9−76527
錦州会

目　次

挨　拶 …… 会長 森山誠之 …… 1
第12回総会報告 …… 3
第12期決算報告書 …… 4
錦州断片 …… 吉野敏夫 …… 5
錦会報と満洲の回想 …… 吉野喜市 …… 8
孤児慰藉金の手紙 …… 8
錦西残留婦人長岡敏子さん一時帰国 …… 9
会員ミニ情報 …… 9
会員異動 …… 12
計　報 …… 13
錦州中国人殉難者名訂正 …… 13
特　報：ノ連地域等抑留者に慰労品の贈呈等 …… 13
錦州関係残留孤児等名簿 …… 14
あとがき …… 15

錦会時代の『錦会報』表紙

錦州会友好訪中団の錦州訪問
撮影日：1992 年 6 月 15～18 日
（村尾美智子「我的故郷錦州」
『錦州会報』17 号、1993 年）

文化交流により錦州会へ送られた掛軸
撮影者：大野絢也
撮影日：2017 年 9 月 10 日

錦州高女正面玄関での記念撮影
撮影日：1992 年 6 月 15～18 日
（村尾美智子「我的故郷錦州」
『錦州会報』17 号、1993 年）

落し、一般の会員を擁することのできる体制として、正式に錦州会が発足したとされる[3]。しかし、すでに 1950 年代より錦州省の警察関係引揚者による錦州警友会が同じ「錦州会」へと改称していたことが判明した。そのため、1988 年までは名称の重複を避け、錦会という名称で活動していた。錦州警友会を母体とする錦州会は、錦州からの引揚者救済や情報交換といった活動に消極的であったため、錦会が実質的な錦州の引揚者団体として

錦州会広済寺塔維修竣工訪問団の記念撮影
撮影日：1996年10月18日
（「広済寺古塔修復竣工式典について」『錦州会報』21号、1997年）

機能することになったという複雑な遍歴がある[4]。

錦会は、1979年には錦州一帯の「終戦記録」として『最後の満洲――錦州終戦前後』を刊行している[5]。また、国際善隣協会や東北地区連合会とも連携し、残留日本人孤児探しの活動にも関わっており、錦州出身孤児の情報交換の場ともなっていた[6]。

また、1980年代より複数回にわたって中国訪問旅行を行っていた。現地の錦州市政府を通じて、「友好訪中団」や「広済寺塔維修竣工訪問団」というかたちで盛んに交流を展開していた[7]。日中国交正常化後のこうした錦州会による日中の民間交流については、『錦州会報』上に多数の記事があり、今後機会があれば紹介したい。

おわりに

本稿では、宣雄氏によって提供された回想録「錦州と旅順の思い出」の背景となる宣雄氏の満洲経験および錦州会の概

要について紹介した。錦州会の会員の方々から寄贈された『錦州会報』や他の史資料も大変貴重なものである。それらについても今後、会報の記事目録作成や整理作業、電子化などを逐次進めていきたい。また、会報については欠号があるため、引き続きその部分を所有している方がいないか、情報収集を行っていく予定である。

「錦州と旅順の思い出」は、錦州からの引揚者 2 世である宣雄氏の少年時代を回顧したものである。そのため、当時少年期を満洲で過ごした方々の代表的な記憶像の内容も含まれており、このような記憶をたどられた方は少なくない。また、当時家族とともに行った旅順旅行の記憶や、当時の現地中国人との交流についても触れられている。このような回想録は、日本の敗戦直後から国共両軍の軍事的衝突が激しく展開されたという当時の錦州を生きた人々の記憶を知る上で、参考になるものである。他の回想録や関連資料と対照しながら検討することで、より多様な満洲像を解明することにつながるといえよう。

最後になるが、小坂宣雄氏には錦州会の内部で史資料や情報の提供などを呼びかけていただき、また満洲経験の回想録を本研究会にご提供いただいた。ここに衷心の謝意を示したい。また、錦州会の会員の方々からも多くのお力添えをいただき、錦州や満洲に関連する数多くの関連資料を提供していただいた。特に菊池暘子氏には、複数回にわたって錦州会に関する情報や史資料に関する連絡をくださった。『錦州会報』など貴重な史資料についても、本研究会への提供についてご厚遇いただいている。ここに記して感謝の意を表したい。

脚注

(1) 小坂宣雄「引揚第一歩の地『佐世保』訪問記」『錦州会報』22 号、1998 年。

(2) 小坂宣雄氏とその家族の略歴については、宣雄氏本人からご提供いただいた情報をもとに、まとめたものである。

(3) 森山誠之「第 12 回総会あいさつ」『錦会報』12 号、1987 年。

(4) 1988 年 9 月 18 日に開催された錦州会第 13 回総会で「錦会」から「錦州会」に名称が変更された。会報名も『錦会報』から『錦州会報』に変更となっている（森山誠之「第 13 回総会あいさつ」『錦州会報』13 号、1988 年）。

(5) 品川安衛編『最後の満洲――錦州終戦前後』錦州会、1979 年。

(6) 会報上では、残留日本人孤児の名前や情報を一覧で掲載し、会員に対して情報提供を呼びかけていた（「錦州関係残留日本人孤児」『錦会報』8 号、1983 年）。

(7) 錦州会会員の間では、錦州へ訪問することを「訪錦」と表現していた（志村忠一「第二次訪錦感想」『錦会報』8 号、1983 年）。

凡例

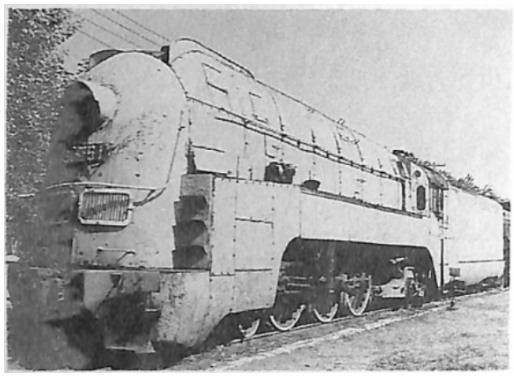
・旧字体や異体字は常用漢字、旧仮名使いは現代仮名使いに変換した。
・本史料の史料としての性質を考え、固有名詞や名称の揺れなど、各表現は原文のまま掲載した。
・各段落の最初は、1 文字を空けて編集した。
・「旅順旅行の思い出」と「中国人（旧満人）との交流の思い出」の 2 篇のタイトルは、見出し形式とした。

本文

旅順旅行の思い出

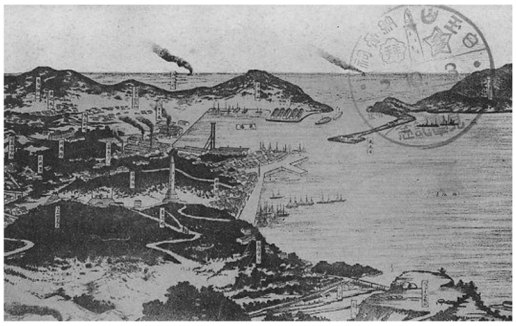
私は大連生まれ、数え年 6 歳から錦州育ちの少年でした。1941 年春に父が県公署（県庁）から市公署（市役所）へ転勤したので、その年の 4 月中の何日かを利用して大連、旅順旅行をした記憶と、2001 年に、ニューヨークでツイン・ビルが過激派が乗っ取った旅客機で破壊された年の秋に貿易関連団体が企画した大連、旅順旅行を懐かしく思い出しました。

昭和 16 年（1941 年）の家族旅行は奉天より“あじあ号”で大連迄の旅を経験しました。当時の錦州からの奉山線（ほうざん線）の急行列車に比べて、スピードの速さ、揺れの少なさに、日本の技術のレベルの高さを実感しました。大連では従姉家族と父の友人宅を訪問し翌日、旅・大北路（だと思いますが）で旅順に向か



あじあ号「パシナ」型機関車

旅順白玉山旧市街より白玉山を望む



旅順港全景

旅順二百三高地　乃木保典君戦死の場所

い白玉山の多分官吏（公務員）用のホテルに到着し、近くの博物館で初めてミイラを見た事を覚えています。

翌日、4 月 29 日は天皇誕生日、快晴で白玉山から見下ろす旅順港には停泊している満艦飾を掲げた軍艦が強く印象に残っています。

その後、日・露戦跡巡りのツアーは、はげ山で塹壕跡の残っている、乃木大将の息子が戦死した二百三高地、多くの白襷隊員が戦死した鶏冠山北堡塁、日・露の両将軍が会見した水師営が、今でも強く印象に残っています。日・露両軍の将校が夫々軍刀を纏っての記念写真に写っているのと、北堡塁では戦死したロシア軍将軍の記念碑に、戦った両国の軍人が如何に“人間”としてお互いを尊重した時代であったかと感じたのも、その翌年、昭和 17 年（1942 年）2 月にシンガポールを占領した時の山下将軍とイギリス軍パーシバル将軍との降伏会見の雰囲気の違いに違和感を感じた事も記憶に残っています。

大連への帰路は、旅・大南路、丁度、桜並木の満開時期で、初めて“桜花見”を満喫しました。錦州では杏子の花を桜の代わりに見ていましたので。

2001 年の大連、旅順と北京旅行は当初

東鶏冠山北堡塁
ロシア軍コンドラチェンコ少将の墓碑

旅順の桜

水師営会見所

水師営会見を語る棗の名木

乃木ステッセル両将軍の会見

春に企画されていましたが、旅行社のチョンボでおじゃんになり、秋に再企画されました。

併し、ニューヨークでのビル破壊の影響で、実際の参加者は、企画をした責任者と私達夫婦の三人だけの旅行でした。そのお陰で私にとっては、大連、旅順旅行は私本位のツアーとなり、私の思い出の場所巡りとなりました。

旅順では戦前のツアーと異なり、中国軍施設に関連する地区は行けませんでしたが、二百三高地は樹木に覆われていたのには驚きました。鶏冠山北堡塁は、ほぼ同じ様な佇まいでしたし、水師営も外観は殆ど変わりなく、ガイドの説明は通り一片の説明でしたが、私にとっては“水師営”の唱歌を口ずさみながら、昔の思い出に浸る事が出来ました。唱歌、水師営の歌詞は、

“旅順開城約なりて、敵の将軍ステッセル、乃木大将との会見の、処は何処（いずこ）水師営、庭に一本（ひともと）棗（なつめ）の樹、弾丸跡も著るく（いちじるく）崩れ残れる民億に、今ぞ、相見る二将軍。（以下省略）“

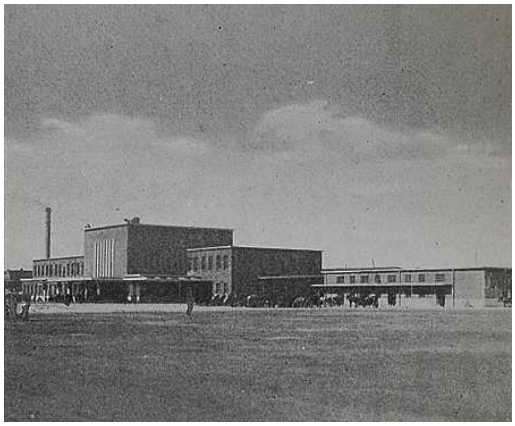
懐かしく思い出すのは私だけでしょうか？

中国人（旧満人）との交流の思い出

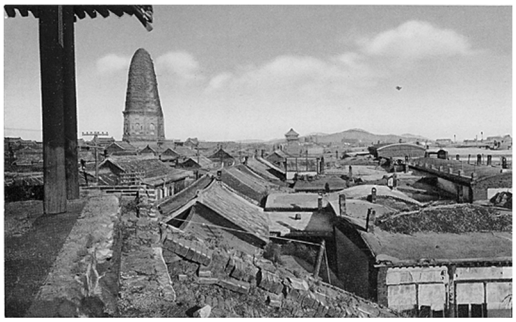
1945 年、終戦直後、ソ連軍が撤退後、中共軍（現在の中国軍）統治下の錦州地区も、アメリカ軍に支援された国府軍に代わり統治され、年末には錦州に行政府が設置された時、旧満人に加えて日本人の少年も、民族融和の目的で、雑用係として採用するとの事で、同期の八田君と応募し採用されました。

旧満人少年達と 10 人程、事務所の片隅で“ざこ寝”、朝には部屋の掃除から、職員の三度の食事当番、後片付けの作業でした。一人の“とっぽい”旧満人少年が机を拭く作業担当でしたが、きちんと拭き掃除をせずに“チャランポラン”と机の間を鼻歌交じりに動いていたのが、後程出勤して来た職員に“机が汚れたままになっている”と指摘され驚いた事に、床掃除をしていた私を机当番と申し立てられ、私は抗弁しなかった為、叱られた次第でした。併し早めに出勤していた別の職員が、後程責任者に事実を伝えたとの事でその少年も私も、特に後のお咎めはなく、その少年は真面目に作業する様に変わった様でした。

共産軍が北へ退くに従って 3 月初めに行政府は奉天（現在のシンヨウ）に移動する事になり、私も同行する事になりました。あの少年はその後同僚として何か併し二か月程後に、錦州からの引き揚げが、五月から始まる事となった時、あの



錦州駅の様子



錦州市街

奉天駅駅舎

少年は奉天駅迄付き添って呉れ、錦州迄と私の事に気を使って呉れて居りました。の切符の手配、見送り迄して呉れました。

行政府の職員や旧満人の同僚達も人種の隔てなく僅かの期間でしたが、一緒に生活を共にした事を、今、懐かしく思い出しました。

2017 年 10 月 28 日

1937 年の錦州市街図

（萩原隆「錦州時代回想記」『錦州会報』23 号、1999 年）